

# 周年放牧生産子牛の吸乳期の発育状況と今後の研究課題

片 平 清 美

## 目 的

入来牧場での周年放牧により生産された黒毛和種子牛の吸乳期の発育については、1998年の技術発表会で子牛の発育に及ぼす要因は施設、年度及び季節の影響があり、生時体重が小さく、吸乳期 DG が500 g 以下の子牛での発育改善技術の向上が必要であることを明らかにした（技術研修報告 第4回）。

本研究では、周年放牧で生産される子牛の吸乳期の体重、体高、胸囲及び腹囲の発育について検討し、今後の吸乳期における管理上の指針を得ようとした。

## 材料と方法

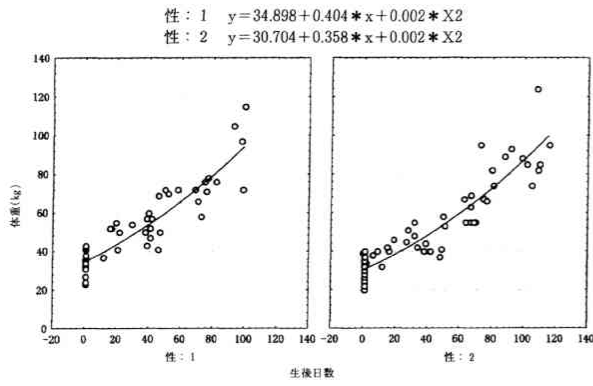
吸乳期の発育曲線は、1998年7月～1998年12月の間に生まれた51頭の子牛のデータを用いた、90日齢時体重と離乳時の胸囲と腹囲の差については、1995年1月～1998年8月の間で生まれた456頭の子牛のデータを用いた。

## 結果と考察

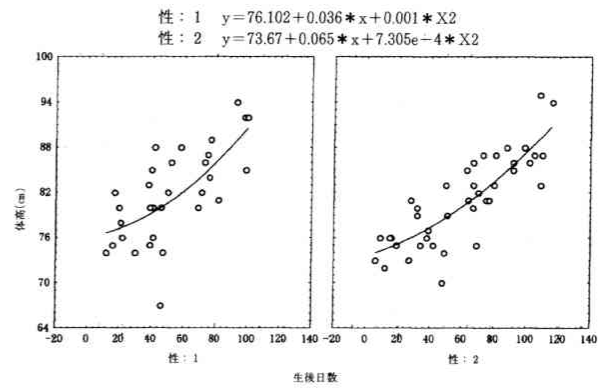
吸乳期の体重及び体高の発育は雄及び雌とも、日齢が進むにつれて発育が60日齢以降から特に向上する傾向が認められた（第1図・第2図）。しかし、胸囲及び腹囲では日齢が進むにつれて発育は向上するが、60日齢以降の発育曲線が緩やかになる傾向が見られた（第3図・第4図）。

周年放牧生産子牛の90日齢時体重は、雄では90kg～100kgでの度数が多く見られ、雌では70kg～100kgでの度数が多く見られた（第5図）。離乳時の胸囲と腹囲の差は、雄雌とも5～15cmの間が多く見られた（第6図）。

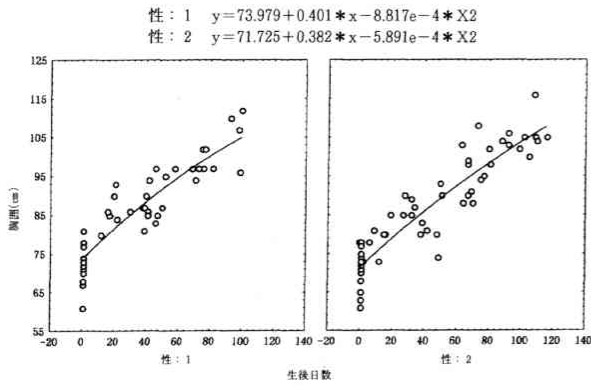
以上のことから、吸乳期の発育曲線についてはデータ量が少ないため一定の結論を得ることはできなかった。このため、今後も吸乳期の発育データを収集して検討する必要があると考えられた。90日齢時体重のヒストグラムで、去勢牛では90kg以下の個体の頻度がまだ多く、雌牛でも80kg以下の個体の頻度が多いことから、周年放牧での黒毛和種生産では吸乳期発育向上に関する技術開発が、依然として不可欠の課題であると考えられた。



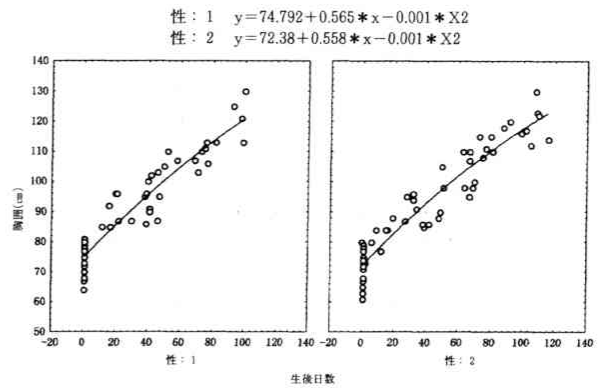
第1図 周年放牧生産子牛の吸乳期体重発育曲線



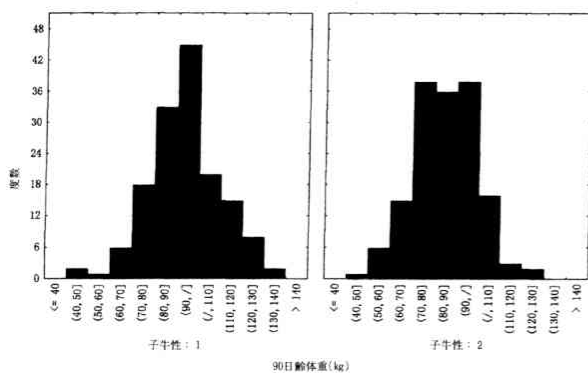
第2図 周年放牧生産子牛の吸乳期体高発育曲線



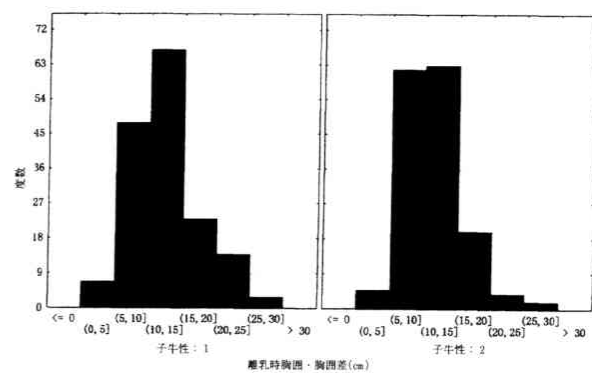
第3図 周年放牧生産子牛の吸乳期胸囲発育曲線



第4図 周年放牧生産子牛の吸乳期胸囲発育曲線



第5図 周年放牧生産子牛の90日齢体重ヒストグラム



第6図 周年放牧生産子牛の離乳時胸囲・胸囲差ヒストグラム